

令和6年度 名古屋市教育研究員研究計画書 4番 問題発見・解決能力が高まる社会科学学習

名古屋市立上名古屋小学校教諭 荒木 健太

I 研究のねらい

人工知能の活用が一般化し、多くの職業が人工知能に取って代わられることが予想されている。予測困難とも言われる世の中において、人々はその都度、働き方や生活を変容させて社会の状況に対応していくことが必要になる。こうした世の中で、自分や社会をよりよいものへとするためには、主体性や発想力、行動力、すなわち自分で問題を見つけて、解決していく力が求められる。学習指導要領総則では、「問題発見・解決能力」は学習の基盤とされている。しかし、問題発見する力の重要性は指摘されていたものの、ここでいう問題とはどのような問いで、発見する力を育てるためには何が必要かという共通理解は図られていない。吉川幸男氏は著書の中で「社会科の学習対象として取り上げられる事象と、それと対比される類例との差異や事象間の差異をもとに展開される学習過程こそ、社会事象を研究的に考え続け、豊かな学習成果へと発展する社会科学学習の根幹的な構成要素であると考えられる。」と述べており、差異を生かし、事象の意味を考える上では歴史学習が有効であると提唱している。歴史学習では、当時の国内情勢や諸外国の動向など様々な条件の中で、人々が問題解決を積み重ねた結果を学ぶ。そのため、国の将来を見据えて行動したり、困難に立ち向かったりした歴史上の人物の決断やその根拠を学ぶことは、これからの予測困難な時代を生きる子どもたちの問題発見・解決能力を育てる上で意義深いと考える。これまでの私が取り組んだ歴史学習の実践においては、当時何が起こったか事実認識をさせて、話し合いを通して人物の取組が社会に与えた影響を考えさせるようにしてきた。しかし、すぐに答えを求めて場当たりの調べ学習になってしまう姿や、教師や友達の示す問いや答えをそのまま鵜呑みにしたり、逆に自分の考えに固執したりして取組の意図や根拠を十分に説明できないまま、社会に与えた影響を考える姿が見られた。

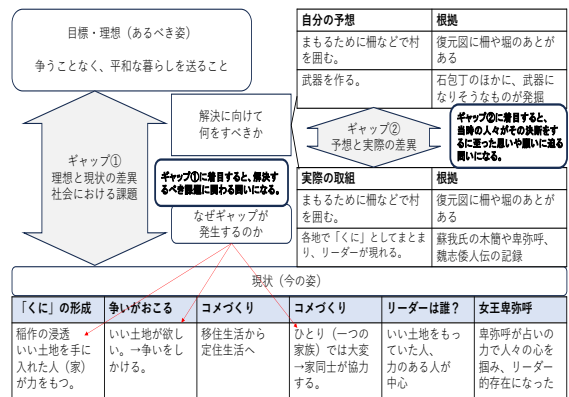
以上のことから私は、差異に着目し、学習に見通しや目的意識を伴って解決すべき問題を見いだす力（問題発見力）と、調べたことに価値付けして根拠としながら社会的事象の意味や相互の関連について考える力（問題解決力）を育てることに重点を置いて実践に取り組む。これらの取組を行うことは、「社会的事象の特色や相互の関連、意味について多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力」を養うという社会科の目標にも迫る上で意義がある。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立上名古屋小学校 第6学年 25人

2 基本的な考え

目指す子どもに迫るために、まず「問題発見力」を高める必要があると考える。「問題発見・解決能力」について、ハーバートA. サイモン氏は「目標の設定、現状と目標（あるべき姿）との間の差異（ギャップ）の発見【資料1】、それら特定の差異を減少させるのに適当な、記憶の中にある、もしくは探索による、ある道具または過程の適用という形で進行する」と



【資料1】問題発見についての構造図

述べている。つまり問題発見とは、現状とあるべき姿とのギャップの構造を把握することから始まり、なぜギャップが生じているのか原因を探り、ギャップを埋めるために何をすべきかを考えることである。次に、調べる過程の中で、「どうして分かったのか」ということを振り返り、「自分が頑張ったから成果が上がったのだ」という子どもたちのメタ認知を促し、自分の学びに価値付けをすることで、自分が調べて分かったこと（意図や根拠）を基にして、社会的事象の意味や相互の関連について考え、問題解決できるようになると考える。以上のことから、「問題発見力」を高める活動と、「問題解決能力」を高める活動を取り入れて実践を進めることにした。

(1) 「問題発見力」を高めるための学習過程の工夫

有田和正氏は「じっくりと『見る』ことから問題発見が始まる。」と述べており、私は有田氏の「見る」目を育てるために、吉川氏の提唱する「差異の思考」【資料2】を子どもたちに意識させることが重要であると考え。しかし、差異に気付かせようとしても、多くの子どもは学習する社会的事象に対して予備知識が十分ではない。そこで、社会科の問題解決学習において単元の導入場面で「ふれる」段階を設定する。この段階では現存している歴史的遺産をその目で見たり、ゲストティーチャーを招いてその時代のことについて聞いたりする活動を取り入れる。活動中、必要に応じてゆさぶりの発問や問い返しを行う。ゆさぶりや問い返しを受けて、社会的事象をじっくりと見て、差異に気付かせる。差異からは自然と新たな気付きや問いが生まれる。それらの気付きや問いをワークシートに記述して、学級で共有する。

場所的差異	時期的差異	人的差異	事物的差異
①点的差異	①「いま」を含む二時点間の差異	①同空間で対面する人の差異	①不特定事象間の差異
②面的差異	②「いま」を除く二時点間の差異	②同空間でそれぞれ活動する人の差異	②半特定事象間の差異
③背景的差异	③「いま」を含む三時点間の差異	③異空間の人の差異	③特定事象間の差異
		④異空間の人たちとの差異	④特定事象と不特定事象との差異

これらの問いは、
 ① 自然発生的である
 ② 何を問題にしようとするのか焦点が明確
 ③ 問う者の直接・間接の経験（事前情報）が表出する。
 つまり、子どもの思考を促し、追究を継続させる効果が期待される。

【資料2】差異の類例と生まれる問いについて

次の「つかむ」段階では、子どもたちの予想（何をすべきか、理想とする姿はどのようなものか）と、現実（実際どのようなことが行われたのか）とのギャップにふれて、「～と思っていたのに、なぜ？」という問いをもたせ、それらの問いから単元の学習問題をつくる。学習問題に対して、自分なりに予想を立てて、実証のためには何を調べなければいけないのかを考えて学習計画を立てる。こうした活動を繰り返し行うことで、子どもたちの「問題発見力」を高めることができる。

(2) 「問題解決能力」を高めるための学習活動の工夫

「調べる」段階での振り返りを行う際に、自分の学びを自己評価したり、他者評価を受けたりして学びの価値（カチ）を判断（ジャッジメント）する時間（「カッチメントタイム」）を取り入れる。「カッチメントタイム」では、自分の学びを客観視して、考えがどのように変化してきたかを見つめ直したり、他者からの賛同や反対意見を聞いたりして、自分の学習が順調か、学習問題の解決に向けて学習を進めることができているかを確認する【資料3】。さらに、本時の目標にした問いが学習問題の解決に向けて妥当であったかを評価して、次の学習への動機付けを行う。その際、異なる立場から思いや願いに迫る問いを立てた子どもでグループを作り、調べたことを伝え合い、思いや願いの共通点や相違点を見付けさせる。最後に、「まとめる」段階では、単元全体を見返して自己の学びに変容があったか、異なる立場の意見を取り入れることができたかを振り返る活動（「ファイナルカッチメントタイム」）を取り入れ、社会的事象の意味や相互の関連を考えさせる。そうすることで、子どもたちの「問題解決能力」を高めることができる。

目標の仮設定 米づくりが始まり、暮らしにはどのような変化があったのか調べる。	調べて分かったこと ①米づくり＝土地のいいところの奪い合い＝争い ②畑やほりをつくる。いい土地は守る。												
深掘り（何が、なぜ、どうやって） ①「なぜ争いが起こったのか」10分（教科書を使って、一人で調べる） ②「争いからむらを守るための方法」（インターネットで、友達と）	調べて分かったことを書く。 カッチメントタイムで、ここから学習内容について振り返る。												
その日の調べで感じたことを自分の言葉にして、グループ内で説明する。	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="3">カッチメントタイム</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>計画に沿って 話し合う調べた</td> <td>○</td> <td>友達にうまく説明 することができた</td> </tr> <tr> <td>調べたことは学習問題に 関係があまり多く</td> <td>○</td> <td>はじめとかわりで 考えに変化があった</td> </tr> <tr> <td>カッチメント まとめ 次回予告</td> <td>○</td> <td>争いを防ぐのは、自分たちの生活をまも るため。というのはどの立場も同じ。 リーダーに必要な能力とはなにか？</td> </tr> </tbody> </table>	カッチメントタイム			計画に沿って 話し合う調べた	○	友達にうまく説明 することができた	調べたことは学習問題に 関係があまり多く	○	はじめとかわりで 考えに変化があった	カッチメント まとめ 次回予告	○	争いを防ぐのは、自分たちの生活をまも るため。というのはどの立場も同じ。 リーダーに必要な能力とはなにか？
カッチメントタイム													
計画に沿って 話し合う調べた	○	友達にうまく説明 することができた											
調べたことは学習問題に 関係があまり多く	○	はじめとかわりで 考えに変化があった											
カッチメント まとめ 次回予告	○	争いを防ぐのは、自分たちの生活をまも るため。というのはどの立場も同じ。 リーダーに必要な能力とはなにか？											

【資料3】調べ活動まとめシート

さらに、本時の目標にした問いが学習問題の解決に向けて妥当であったかを評価して、次の学習への動機付けを行う。その際、異なる立場から思いや願いに迫る問いを立てた子どもでグループを作り、調べたことを伝え合い、思いや願いの共通点や相違点を見付けさせる。最後に、「まとめる」段階では、単元全体を見返して自己の学びに変容があったか、異なる立場の意見を取り入れることができたかを振り返る活動（「ファイナルカッチメントタイム」）を取り入れ、社会的事象の意味や相互の関連を考えさせる。そうすることで、子どもたちの「問題解決能力」を高めることができる。

3 6月実践「天皇中心の国づくり」と10月実践「江戸幕府と政治の安定」における学習展開

<p>単元と目標</p>	<p>単元「天皇中心の国づくり」(7時間完了) 【実践のねらい】 大陸文化の摂取や大仏造営の様子を手掛かりとして、天皇中心の政治が確立されたことを理解し、当時の社会の様子や人々の願いを考え、表現することができるようにする。また、大陸文化を取り入れた政治の様子や大仏造営に込められた聖武天皇の願いや世の中の様子を調べる学習計画を立て、学習問題を追究し、解決しようとするができるようにする。</p>	<p>単元「江戸幕府と政治の安定」(7時間完了) 【実践のねらい】 参勤交代や鎖国などの幕府の政策を手掛かりとして、武士による政治が安定したことを理解し、当時の社会の様子や人々の願いを考え、表現することができるようにする。また、幕府の政策に込められた将軍家の願いや武士を中心とした身分制度の確立による世の中の様子を調べる学習計画を立て、学習問題を追究し、解決しようとするができるようにする。</p>
<p>段階</p>	<p>主 な 学 習 活 動</p>	
<p>ふれる</p>	<p>①前時代の様子を振り返る。 ・体育館や運動場で大仏の手や大きさを再現し、大きさを実感する。 ②当時の庶民の様子、災害やききんの歴史について、再現ドラマ(アニメ)を見る。 ・教師が聖徳太子役となり、当時の様子について質問をする。</p>	<p>①前時代の様子を振り返る。 ・市内分散学習で見てきたことを思い出す。 ・当時の庶民のおかれていた状況の再現ドラマ(アニメ)を見る。 ②博物館の学芸員や「おもてなし武将隊」などをゲストティーチャーとして招き、当時の様子について質問をする。</p>
<p>つかむ</p>	<p>③聖徳太子が目指した国(争いのない世の中)をゴールとして、理想の姿とする。 ・現実と理想の間の問題点について考える。 ・問題点を整理して、学習問題をつくる。 【検証場面1】 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 【学習問題】 この時代の国づくりに関わった人たちは、どのような願いをもっていたのだろう </div> ④学習問題に対する予想を立て、学習計画をつくる。</p>	<p>③徳川家康が目指した国(争いのない、豊かな国)をゴールとして、理想の姿とする。 ・現実と理想の間の問題点について考える。 ・問題点を整理して、学習問題をつくる。 【検証場面1】 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 【学習問題】 この時代の国づくりに関わった人たちは、どのような願いをもっていたのだろう </div> ④学習問題に対する予想を立て、学習計画をつくる。</p>
<p>調べる</p>	<p>⑤⑥計画に沿って、自分の予想と事実を比較しながら調べる。 ・授業の終わりに「カッチメントタイム」を行い、自分の学びを調整し、社会的事象の意味や相互の関連を捉える。</p>	<p>⑤⑥計画に沿って、自分の予想と事実を比較しながら調べる。 ・授業の終わりに「カッチメントタイム」を行い、自分の学びを調整し、社会的事象の意味や相互の関連を捉える。</p>
<p>まとめる</p>	<p>⑦調べてきたことから、聖徳太子、聖武天皇、行基のいずれかを選択して、庶民向けのメッセージを考え、その時代の為政者の願いや取組をまとめる。 ・単元全体を通して、自分の学びの変容について振り返る「ファイナルカッチメントタイム」を行う。 【検証場面2】</p>	<p>⑦調べてきたことから、徳川家康、徳川秀忠、徳川家光のいずれかを選択して、庶民向けのメッセージを考え、その時代の為政者の願いや取組をまとめる。 ・単元全体を通して、自分の学びの変容について振り返る「ファイナルカッチメントタイム」を行う。 【検証場面2】</p>

4 実態調査について

単元「縄文のむらから古墳のくにへ」の学習において、「ふれる」段階を設定し、その時代における問題点を把握する。その後、調べ活動をする際には、異なる立場で調べた子どもで組織したグループで振り返り活動を行い、自分が調べて分かったことを表現し、社会的事象の意味や相互の関連について考えることができているかをワークシートへの記述から調査をする。また、質問紙法により、自分の学びに向かう力について調査し、まとめの記述と比較して分析を行う。

5 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「ふれる」段階を設定し、現存している歴史的遺産をその目で見たり、ゲストティーチャーを招いてその時代のことについて聞いたりすることは、現状と理想との差の間に生じる問題点を把握し、ギャップが生まれる理由について考える上で有効か、ワークシートの記述からつかむ。
- (2) 学びの価値付けを行い、自分の学びを調整したり、異なる立場で調べた子どもで相互評価をして、思いや願いの共通点や相違点を見付けたりする活動を取り入れることは、社会的事象の意味や相互の関連を考える上で有効か、ワークシートの記述からつかむ。

Ⅲ 年間の研究計画

月	研究・調査・授業研究等
4 5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究主題の基本的な考え方を基に研究の方向性を定め、研究計画書を作成する。 ○ 実態調査を行う。 ○ 第1次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。 ○ 長期研修の日程を作成する。
6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1次授業研究 実践単元「天皇中心の国づくり」 【検証点1】「ふれる」段階を設定し、現存している歴史的遺産をその目で見たり、ゲストティーチャーを招いてその時代のことについて聞いたりすることは、現状と理想との差の間に生じる問題点を把握し、ギャップが生まれる理由について考える上で有効か、ワークシートの記述からつかむ。 【検証点2】学びの価値付けを行い、自分の学びを調整したり、異なる立場で調べた子どもで相互評価をして、思いや願いの共通点や相違点を見付けたりすることは、社会的事象の意味や相互の関連を考える上で有効か、ワークシートの記述からつかむ。
7	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1次授業研究を分析し、基本的な考えを修正する。 ○ 中間報告書を作成し、今後の研究の方向性を明らかにする。
8	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長期研修（A日程）研究先進校や、先行研究者を訪問し、研究を深める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・東北学院大学 教授 佐藤正寿氏 ・白百合女子大学 教授 中田正弘氏 ・関西学院初等部 教諭 宗實直樹氏 ・広島大学 准教授 深谷達史氏 ・熊野町立熊野第一小学校 教諭 中村祐哉氏 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 第2次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。
9	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長期研修（B日程）研究先進校や、先行研究者を訪問し、研究を深める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学附属小学校 教諭 粕谷昌良氏 </div>
10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第2次授業研究 実践単元「江戸幕府と政治の安定」 長期研修で学んだことを基に授業改善し、【検証点1】【検証点2】を検証する。
11 12	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1・2次授業研究の成果や課題、長期研修の成果や今後の研究の課題などを明らかにし、最終報告書を作成する。
1 2 3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「問題発見・解決能力が高まる社会科学習」について、1年間の成果や課題をまとめ、発表する。 ○ 一年間の研究を反省し、今後の研究の方向付けをする。

参考・引用文献 有田和正著『「追究の鬼」を育てる』明治図書(1989年)

澤井陽介、中田正弘、加藤寿朗、宗實直樹著『これからの社会科教育はどうあるべきか』東洋館出版(2023年)